価値論と時間性
——価値形態の成立と物的社会関係——

丹辺　宣彦

マルクス主義の「価値」という概念の理解は——それをめぐっては、多くの議論がなされてきたにもかかわらず——、今日なおある種の不明瞭さを払拭することができないでいるのが現状である。本稿は、物的な社会関係と「時間性」との関連を検討することによって、またこれをとくに「価値形態」の成立の機制を中心としてみてゆくことによって、「価値」という社会現象の内実を明らかにすることを目指す。このことによって疑似観念論的な解釈と俗流唯物論的な解釈の双方を回避することが意図されるのである。

1．本稿のねらい——「価値」と労働の「時間」

価値論がマルクス主義の社会理論の存立そのものにとって欠かすことのできない、基底的とも言うべき意義を担っているということ、これは今さら強調する必要もないほど自明な事柄であろう。使用価値と交換価値をもつ無数の項が形成している関係という点まで広げて考えた場合、それは「商品」、「貨幣」、「労働力」、「剰余価値」、「資本」等のような最重要な抽象的諸概念の意義およびそれら相互の関係を規定するのに欠かせないのみならず、上部構造と下部構造の関係を規定したり、具体的な社会構成体における生産様式相互の連接を特定したりする際にもなしですますことはできないのである。マルクス自身も『資本論』出版後のクーゲルマン宛の手紙で、「価値法則がどのように貫徹されていくかを逐一明らかにすることこそ、科学なのです」(1) とまでのべて、その重要性を強調している。にもかかわらず、「価値」という現象ないしカテゴリーの意義が完全に明らかにされているかと言えば、現状ではそうした状態からは程遠いと言わざるをえない。こうしたことに応じて、ベーム＝バヴェルクとヒルファーディングのあいだで行われた論争以来の伝統が示しているように、価値論の妥当性そのものを問う議論がマルクス主義の内外を問わず断続的に行われてきたし、またそれは単なる個別的な論点以上の意義をもってきたと言うことができよう。

本稿は、この価値論にもっぱら「時間性」という観点からの検討を加え、「価値」というカテゴリーの意義をより明瞭なものとすることを目指すものである(2)。この企図は、むろん恣意的に目論まれたのではないし、それ自体としては特に目新しいものでもない。カトラー、ヒンデス、ハーストら——彼らは価値論の妥当性については疑いを抱いているのだが——が総括しているように、多くの論争がなされてきたにもかかわらず、「『価値』論において中心的であるのは社会的な尺度標準としての労働時間の機能なのである。」(3)

にもかかわらずこのような課題を設定しておくのは、従来の分析が、こうした観点を採用し

た際に考察することを要求される論理を不十分にしか展開してこなかったという認識に基づくばかりでなく、まず第一に——あまりにも有名であるが——マルクス自身が抽象的人間労働としての「価値」の本質規定に——労働の——「時間」という契機を組み込んでいることによっている。

「……一つの使用価値または財貨が価値を持っているのは、ひとえに、その中に抽象的に人間的な労働が対象化されているから、または物質化されているからである。それでは財貨の価値の大きさはどうして測定されるか？

その中に含まれている『価値形成実体』である労働の定量によってである。労働の量自身は、その継続時間(Zeitdauer)によって測られ、そして労働時間もまた、一定の時間部分においては、時、日のようなその尺度標準をもつ。［下線強調は引用者のもの。以下も同様］」(4)

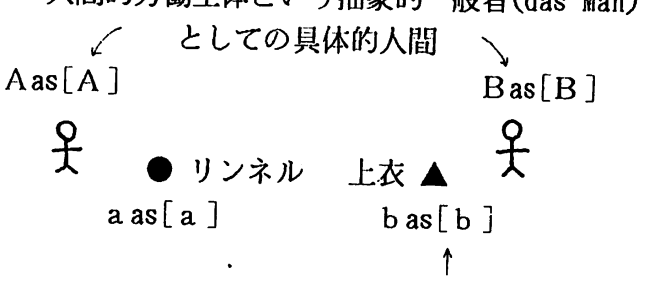
「価値」の本質はこのように規定されているにもかかわらず、ここにはすでにマルクス主義の価値論固有の理論的困難が顔を覗かせている。すなわち実際には、商品を交換する当事者の意識にとってそうしたものとして現れることがないばかりか、「価値」の本質規定を把握している社会科学者＝学知的主体にとっても、具体的な個々の商品の価値は依然として抽象的な労働としてもその継続時間としてもみえてはこないという点である。つまり、どのような主体にとっても眼前のこの上着が質的に「抽象的な人間労働」として、またたとえばその「312時間35分40秒」に等しいものとして現れることなどありえないのである。そうだとすれば、「価値」はいかなる意味で抽象的な人間労働であり、またその大きさをその継続時間によって規定されていると言いうるのであろうか。意識に直接に現象として現れない関係をある事柄の本質規定に用いることは果たして正当なのであろうか。この問題——物神崇拝のメカニズムにもつながる重要な問題である——が、本稿が以下で検討していく中心的な課題である。また、「時間」規定は交換価値の側面にのみかかわるものとされているのではない。マルクスは『要綱』のなかでは、使用価値を形成する労働のことを「生きた時間による諸物の形成」としての「それらの時間性(Zeitlichkeit)」としてとらえており、またすべての経済は結局のところ「時間の節約」に帰着するのだとものべ(5)、経済現象と時間との関連を強調している。つまり、価値論を時間との関係において問うということは、ある事柄の偶然的な属性を問題にすることをはるかに越える意義をもつと予想されるのである。

とは言っても、このような小論ではこの問題を完全に論ずることなど到底できない。そこで、本稿は「時間」を構成している物的な社会関係という点から、商品－資本主義社会において「価値」という現象が成立する必然性を、とくに価値形態、それも「x量商品a=y量商品b」という最も単純な価値形態が成立する場を中心として検討していくことにする。その際に、次の三つの点が留意される。1)「時間」という現象が単に主観的なものでなく、「客観的」に妥当するものとなるときの条件と物的な社会関係との関係。2) 使用価値を形成する具体的な労働の「時間」と交換価値を形成する抽象的な労働の「時間」との関係。3) 諸主体の意識にとって「時間」が「時間」として現れなくなる社会関係のメカニズム。以上の三点は、唯物論的な社会理論の根幹にかかわる問題であるにもかかわらず、従来の解釈では徹底的には追究されて

こなかったのである。したがって、本稿の作業は、特殊な視点からの価値論ないし価値形態論の検討であり、けっしてその包括的な、あるいは体系的な研究ではない。

ところで、検討に入る前に一つの確認を行っておかなくてはならない。上の問題は、「価値」（あるいは「時間」）というカテゴリーをなんらかのかたちで意識の構成作用の結果に帰する（疑似）観念論的な枠組や、あるいは言語構造の問題に回収して説明しようとする記号論的な図式では、十分に理解することはできない。前者の例として、まず廣松渉の価値形態の解釈をみてみよう。廣松は、商品交換がなぜ商品aがその価値を商品bの使用価値の定量を用いて表現するというような「廻り道」をとらざるをえないのか、ということにかんする宇野弘蔵と久留間鮫造の論争を受けて次のような議論を展開している。すなわち商品交換の場では、主体Aにとって B は具体的な人格としては問題とならないために、人間的労働主体という抽象的一般者(Das Man)すなわち B as[B] として現れ、彼の生産物 b は B as[B] の労働生産物として、すなわち抽象的労働の体化物としての具体的生産物 b as[b] として現れる。他方 B にとって A は自分が同様に A as[A] として現れ、商品 a は a as[a] として現れることを知っている。そして b as[b] が a と等置されると、そのことによって、A 自身にとっても彼の生産物 a は a as[a] すなわち抽象的労働の体化物としての具体的生産物となる、とされるのである。かくして A にとっては a も b も抽象的労働の体化物としての具体的生産物となる。「この価値としての同一性が基礎になって、定量関係、つまり量的にも同一のものを等置することが、論理上、可能となる。……A と B とが、たんなる対自的な見地でも、単なる対他的な見地でもなく、対自的－対他的、対他的－対自的な、まさしく間主体的（共同主観的）な見地に für uns に立つことにおいて、両生産物の質的かつ量的な等置関係が存立しうるのである。」(6)

廣松渉による価値形態の解釈



Bas[B] の労働生産物としての、すなわち抽象的労働の体化物としての具体的生産物

きわめて複雑な論理をふくむ解釈であるが、このような考え方にはいくつかの問題点がある。すなわち、商品交換の当事者たちは実際には上の過程に相当することを「意識」しているわけではないにもかかわらず、交換をなしているわけで、このことは、für uns な立場にある意識の構成作用を持ち出すことによって説明しきることはできない。その場合、「日常的」な意識と「学知的」な意識との差がなぜ生ずることになるのか、という点が説明されないまま残るからである。また、抽象的人間労働としての等一性ということから量的等置を直接導きだすことには無理がある。これは、アルコールと石油が「液体」としては等しい物だということを認識したとしても、そのことから交換比を導きだすことはできないことと事情は似ている。また量的に等置しうるとしても、なぜそれが労働「時間」と対応するのかは分からないであろう。上の論理では、抽象的人間労働というカテゴリー

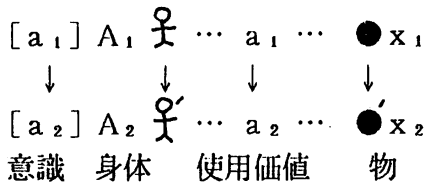
は、社会的に媒介されてはいるにしても、学知的な「意識」の構成物たる意識内容以上のものではありえないのである。

他方、価値ないし価値形態を言語形式ないし言語構造の問題から説明しようとするのも問題である。「ソシュールにならっていえば、相対的価値形態は『意味されるもの（シニフィエ）』、等価形態は『意味するもの（シニフィアン）』であり、これらの結合としての価値形態が記号（シーニュ）なのである。……根源にあるのは使用価値（シニフィアン）と使用価値（シニフィアン）の任意の関係にほかならない。」(7) このような考えかたを押しすすめて行くと、価値形態とは記号が取りむすぶある種の社会関係であることになるであろうが、そうだとすれば、価値形態の問題は言語構造の枠のなかに完全に回収してしまうことができる——こうした立場は言語から独立した関係の存在を消去してしまうわけで、観念論の発想と相似たものと言いうる——ことになろう。「価値」とは記号間の関係がある記号に付与する特性であり、「労働」の単なる別名であることになるだろう。「価値の同一性を、人間およびその労働の同一性にもとめることは同義反復であって、なんら問題の解決にはならない。一体異質なものが同一であるのはなぜかと問うているのに、異質なものは同一であると答えているだけだからだ。」(8) こうした考えかたでは、「価値」と「抽象的労働」というカテゴリーが表現している関係の差異が見失われ、消去されてしまうことになるのである。

2.「時間」の客観的妥当性と社会関係

i) 生産ないし消費の最も単純なモデルは図1が示しているように、意識、身体、使用価値をもつ物的対象という諸要素の、身体を軸とした相互媒介的な結合であると考えられる。意識はある価値観にもとづいて身体を介して物的対象を用い、変形する。逆に物的対象の使用価値の作用は身体を介して意識に働きかけ、方向づける。

図1



「[労働は] 人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。……彼の外にある自然に働きかけ、これを変化させるとともに、同時に彼は彼自身の自然を変化させる。……労働過程の終わりには、その初めにすでに労働者の表象のなかに存在していた、したがってすでに観念的には存在していた結果が現れてくるのである。」(9)

意識は身体や物的対象や自分自身の状態や配置の前後関係を意識し、態度決定しつつ行為を方向づけ、意味を付与する事ができる。しかし、物的な対象との関係における時間は質的にも量的にも、意識の思いのままにすることのできるものではない。繭からいきなり上着を仕上げることは出来ないし、織ってしまった布を繭に戻すことはできない。平均で30時間かかる工程をいきなりその1／100に短縮することはできない——意識内部の幻想的な表象としてはもちろん可能であるが——のである。したがって、時間ないし時間性の発生根拠を、現象学のように意識の運動形式に回収してしまうことは、生産や消費の問題を取り扱う際には適当ではない

図2

社会的役割についての解釈図式

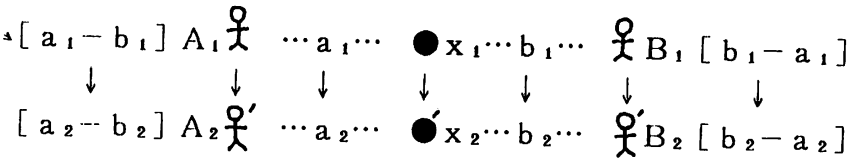
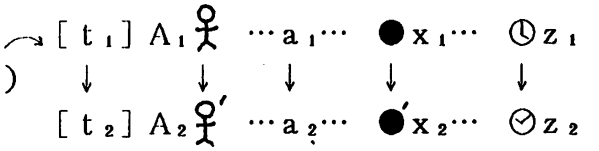


図3

時間量（時刻）の意識



計時装置

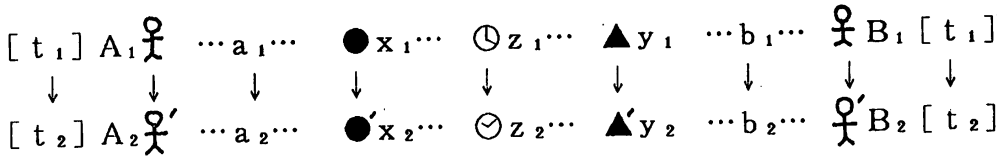
と言えよう。さらに注意しておかなくてはならないのは、この図式はいまだに社会関係を考慮にいれたものではないし、またここでの時間は「計測された」時間ではないということである。

ii) i) の図式に社会関係を入れたのが図2である（[a−b] は、諸主体——ここではAとB——による物的対象の使用にかんする主体Aの規範的な表象であるものとする）。ある主体の行為は物質的な項（身体なり生産物）の形態変化を介して他者の身体に働きかけ、他者の意識にたいして現れることができる。このときひとは他者の（先行する）行為と現実的な関係をもち、それに基づいて自らの行為を方向づけてゆくことができる——すなわち物的に媒介された「社会的行為」が可能となる——ので、個々の主体の時間は物的な社会的媒介を経ていると言えよう。このように物的な項による媒介があることは、他者の行為の意味を——たんに想像上のでなく——現実に理解するための必要条件なのである。この条件を欠くと、その限りで他者理解は空想的、観念的な性格をおびざるをえず、他の領域の、あるいは過去に生じた物的媒介に依拠せざるをえない。

iii) 図3は客観的に計測された時間性が出現するための条件を表している。出来事の経過を時間座標のうえに位置つけたり、あるいはそれが要した時間を計測したりすることは、計測される事象を、基準となる事象と比較し、同期化することによって、またそうすることによってのみ可能となる。とくに時間を量的に計測する場合には、規則的な形態変化を伴う物的な項＝装置の運動と比較しなくてはならない。このような物的事象の例として、天体の運動、重力による水や砂や振り子の運動、燃焼作用のような化学変化、力学的な力（ぜんまい）、結晶の発振数などが用いられてきたことは周知のとおりである[10]。こうした諸装置——典型的には「時計」——は「時間を計る」という特殊な「使用価値」をもつことになるが、これらなしには意識にたいして現実の対象の運動と合致する「客観的」な時間（時刻と時間量）が現れることはない——むろん意識の主観的な解釈体系の内部でなら、いくらでも精密な時間量や時間単位を構成することも可能であろうが[11]——と言える。

iv) 計測された時刻や時間が複数の主体の意識にたいして現れ、社会的にも客観的に妥当するのは、ii) と iii) の条件がともに満たされているときのみである（図4）。このとき、現在の他者の行為は可視的であり、諸主体は各々他者

図4



の行為の実効的な理解に基づいて行為することができる。またある主体が生産や消費に要した時間は、自分だけでなく他者の意識にも現れることができ、その大きさは、双方が同一の計時装置を用いるなら、原則的には一致すると考えられる。

次に、以上の議論を前提としつつ、前資本主義的生産様式における社会的行為の時間性を検討してゆくこととする。

3．前資本主義的生産様式の社会関係と時間

①まず最初に、前資本主義的生産様式というわけではないが、議論を分かりやすくするために、『資本論』でも引き合いにだされている孤島のロビンソン・クルーソーの例から検討してみることとする。

> 「彼の財産目録は、彼がもっている使用対象、彼の生産に必要な各種の作業、最後に、これら各種の生産物の一定量が平均して彼に支出させる労働時間の明細表を含んでいる。ロビンソンと彼の自分でつくりだした富をなしている物との間の関係は、ここではきわめて単純であり、透明である……。そしてそれにもかかわらず、このなかには価値の一切の本質的諸規定が含まれている。」(12)

ロビンソン・クルーソーが行う労働と、その労働の結果得られる生産物との関係は前節のi) ないし iii) の図式の関係を構成しており、意識と物的対象が身体を介して緊密な相互作用を取りむすぶために、その限りで質的な時間も量的な時間も神秘化されることはない。たとえば労働における熟練や集中のしかたは、生産物の仕上がり方などに敏感に反映し、後者をみることによってロビンソンは自分の労働（ないし消費）のそのときどきの「意味」を確認することができるのである。つぎに時間量にかんしてみてみよう。ロビンソンがx量の生産物a、y量の生産物b、z量のc、……を必要とし、その生産にそれぞれt_1、t_2、t_3……時間を必要とするとすれば、x量$a=t_1$, y 量$b=t_2$, z 量$c=t_3$……という等式が成り立つが、このとき生産物と時間量との対応関係および生産物の単位量あたりの時間的価値（t_1/x, t_2/y, t_3/z ……）は彼の意識に透明なまま現れることができる。

②家族共同体的生産の場合。労働と生産物の関係の「意味」の透明性、x量生産物$a=t_1$時間という関係の明瞭性は、複数の主体が登場してもただちに消失するとは言えない。家族共同体内の分業の場合、各成員が得意とする労働の種類は異なるであろうから、成員のおのおのにとっての各生産物の時間的価値は異なるであろうが、社会的な規範にもとづく分業が各成員に指定する労働と生産物量との対応関係は――そうした社会的規範が各成員に共有されていることと、物的生活圏自体の狭さと簡明さによって――他者にとっても明瞭であり、確認できるからである。したがって、主体Aのx量生産物$a=t_1$時間、Bのy量生産物$b=t_2$時間、Cのz

量生産物 $c=t_3$時間 …… ということが A, B, C ……のそれぞれにとって可視的である。もちろん、ある成員が社会的規範の定める時間で自分の作業を終えることができるとは限らないが、その場合も、他の成員にとってその量的な関係——たとえばAが t_1 時間で終えるべき作業を $2t_1$ 時間かけ、したがって「半人前」であるというような——がみえなくなることはないであろう。安定した物的媒介と対応する同一の社会的規範（＝解釈図式）の共有は、自己と他者の労働の——あるいは分配、消費の——確固たる「意味」を各成員にたいして理解させるので、限定された伝統的な枠のなかにある限りで、諸主体はいかなる意味で他者の行為が自己の行為の根拠となり、また自己の行為がなぜ他者の行為の根拠となるのかを理解することができるのである(13)。

③封建的生産様式　この場合は、本質的な点では②の場合と変わらない。

「……まさしく人身的隷属関係が所与の社会的基礎を形成しているのであるから、諸労働と諸生産物は、その実在性とはちがった幻想的な態容をとる必要はない。……徭役労働は、商品を生産する労働と同じように時間によってはかられるが、各農奴は、彼がその主人のために支出するのが、彼の個人的労働力の一定量であることを知っている。」(14)

自耕地での労働に関してはもちろん、農奴の貢納が領主の直営地での労働のかたちをとる場合にも、現物貢納のかたちをとる場合でも、生産物（量）と労働時間の対応関係がみえなくなることはない（農奴Aのx量生産物 $a=t_1$時間、農奴Bのy量生産物 $b=t_2$時間……）。この場合にも、共有された社会規範——たとえば「週のうち三日は領主の直営地で働かなくてはならない」というような労働時間を規制する規範や労働に意味を与える宗教的な表象など——と社会関係における物的媒介との対応関係が、諸主体の行為が実効的に「社会化」されることを保証しているのである。

以上の議論を踏まえて、次にわれわれはいよいよ本題に入ることとしよう。ただ、以上のケースで問題とされた時間量tは、使用価値としての生産物を形成するのに要した個別的な労働のそれであったことに注意しておかなくてはならない。

4．商品・資本主義社会の時間性と「価値」(15)

宇野弘蔵は、商品社会の時間性を考えていくうえで示唆するところの多い次のような見解を述べている。

「商品生産者は、自己の商品の生産にいくばくの労働を支出したかは、十分に知っている。その点ではロビンソンと同じである。しかしそれが社会的にいかに評価せられるかは知らない。同じ商品が他の生産者によっていかように生産せられるか、あるいはまた自らその需要者となるべき商品がいかように生産してなされつつあるかは知らない。」(16)

たしかに、商品生産者は自己の支出した——使用価値を形成する具体的な労働の——労働時間を知っているはずであり、またその結果得られる生産物の量を知っているのであるから、x量生産物 $a=t_1$時間という先の等式はここでも成り立つ。しかし、先の場合と異なり、1）主体Aは他者の労働時間とその生産物の対応関係（y量生産物 $b=t_2$時間）を知ることはできず、2）

他者の方もこちらの対応関係を知ることはできない。自分の生産物は原則的には自分で使用するのではないから、自分の生産物の自分にとっての時間的価値を知ることにはさして意味はない。ここではそれを欲している他者からの社会的な評価こそが問題なるのだが、これが不可能となるのである。

こうしたことが生じるのは、社会関係における物的な媒介の様態が変化することによる。つまり、これまでの例とは異なり、生産の場では相手の物的な行為を前提としつつ行為することが出来なくなり——したがって相手の行為にたいする想像に基づいて行為する外はない——、交換の場でのみ物的な関係をとりむすぶようになるという点である。「集列性」が社会関係の基調となるのである。

> 「……各人が相互に他人の利害の貫徹を妨げ、一般的な肯定のかわりにむしろ一般的な否定がこの万人の万人に対する戦いから結果する。……相互にたいし無関心な諸個人の相互的で全面的な依存性が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的連関は交換価値というかたちで表現されているが、各個人にとっては、彼自身の活動または彼の生産物はその交換価値というかたちで初めて各個人のための活動または生産物となるのである。」(17)

財の生産に要した労働時間は——質的にも量的にも——もはやそのまま労働の「時間」としては現象することはできず、「価値」ないし個別的には「交換価値」という物象的な形態をとらざるをえない。以下でこのことの根拠を検討することとしよう。

A が t_1 時間で $f(t_1)$ 量の生産物 a を生産するものとし、市場では、同量の同一商品は同一の評価を受けるということを前提にして、a の $f(t_1)$ 量がどれだけの時間量に値するかを計量すると、同一商品の生産量——さしあたりこれは社会的総必要量に一致するものと仮定しておく——が $\Sigma f(t)$、その生産に支出された総労働時間が Σt 時間となるから、社会的に整約された単位当たりの時間的価値は $\Sigma t/\Sigma f(t)$ 時間、したがって $f(t_1)$ 量は $f(t_1) \cdot \Sigma t/\Sigma f(t)$ 時間となるはずである(18)。しかし、そうだとすれば $f(t_1)$ 量生産物 $=f(t_1) \cdot \Sigma t/\Sigma f(t)$ 時間という等式が成り立つので、$t_1 \neq f(t_1) \cdot \Sigma t/\Sigma f(t)$ であるとしても、その時間的な価値は労働の「時間」として現れることができるように思われる。けれども、実際にはこれは絶対に不可能である。というのは、この計算＝整約を現実に行うためには、社会的総必要量を集計したうえで、それだけの量を生産するのに必要な、同一商品を生産する者たちがそれぞれの生産性において実際に支出する個別労働時間の総量を実際に計測し、集計することができなくてはならないからである(19)。このような計測・集計は、商品生産においては、交換の範囲が生産者の視野をこえて拡大し、諸主体の労働時間を特個的に規制する社会的規範が弛緩し、また諸主体が自己の利害追求のために競争相手に対しては自己の生産動向を秘匿しておこうとすること等によって不可能にされている。したがって、$f(t_1)$ 量の $a=f(t_1) \cdot \Sigma t/\Sigma f(t)$ 時間ということを知っている社会科学者も、一商品の時間タームでの価値は絶対に知ることができないし、こうした物的諸条件のもとにあってはどれだけすぐれた意識の構成能力をもってしても、またいかなる言語ゲームによっても不可能である。社会関係は、もはや第2節の iv) の条件をみたしていないのである。

ところで、上の例の場合、生産者 A の労働

は孤立した労働としてみた場合の t_1 時間と社会的に整約されたものとしてみた場合の $f(t_1)\cdot\Sigma t/\Sigma f(t)$ 時間という二つの値を受け取ることになる。Aが平均的な技能の持ち主であるという例外的な場合を除いて、双方の値はむろん一致しない。前者の労働時間は前節の諸生産様式の労働時間と同じく使用価値を形成する具体的な労働の時間であり、その計測は他者にたいしても——潜在的には——「客観的に」妥当するであろう。しかし、先の数式が示しているように、後者は前者の「関係」なのであるから、後者が前者に比べてより実在的でないということはない。後者の場合は確かに集計することはできず、したがって「知る」ことはできないが、個別労働諸時間と生産関数が存在し、諸生産物相互のとりむすぶ市場での——同量の同一商品を同一に評価するような平均化作用としての——社会関係が存在する以上、その時間的値はたんなる観念上の存在ではないからである。個々の商品の、社会的に評価された時間は、意識の構成能力をこえた物的社会関係によって構成されるために、意識にたいしてはそのものとしては現れることができないような「時間」なのである。

またこの「時間」は、一商品のなかに投下され、体化されて量を変えないような「実体」でもない。生産技術が進歩した場合の生産関数を $f'(t')$ で表現すると、旧来の技術で生産された $f(t_1)$ 量のaの時間的価値は、総労働時間は $\Sigma t+\Sigma t'$、総生産量が $\Sigma f(t)+\Sigma f'(t')$ となるために、$f(t_1)\cdot(\Sigma t+\Sigma t')/(\Sigma f(t)+\Sigma f'(t'))$ となり、先の場合に比べて減少するであろう。この場合も、意識の限界を規定している物的社会関係を超越しているような——したがって存在しえない—— 一種の「絶対知」にとっては時間タームでの解を個別商品ごとに出すことができるであろう。以上のことから、「抽象的人間労働」としての時間が、意識の観念的な構成物などではなく、物的な諸項——生産物、生産手段、身体の無数の諸項——が構成している関係として実在しているのだということが了解されよう。

さて、同じ理由から、生産者Aは自己の欲する商品——その生産関数を $g(u)$ で表現しておこう——の整約された時間的価値 $g(u_1)\cdot\Sigma u/\Sigma g(u)$ を知ることはできないはずである。Aに分かっているのは、自分の個人的な労働時間 t_1 のほかには、自分の商品の量 $f(t_1)$、自分の欲する商品bの量、そしてせいぜい市場に出されている商品 a, b の総量にすぎない。したがって、自分の欲求と市場での客観的な交換比——これは諸主体の供給と需要の集積によって与えられる——とを考慮に入れつつ商品bの一定量を自分の商品の一定量に等置するほかはないであろう（不満な場合は生産物をその市場に出すのをやめるであろうが、そのことは市場での交換比を変えるであろう）。つまり、商品生産者は意識的に時間を基準として交換することは決してできず、どうしてもx量商品a=y量商品bという価値形態のかたちで交換を行わざるをえないのである。両商品の生産量が総社会的必要量に一致しているという前提のもとでは、両商品の社会的な時間的価値は等しくなるように交換されるはずである。この等式では、b商品の自然形態＝使用価値（の定量）がa商品の「価値」を表現する現象形態（＝交換価値）となるために、a商品の社会的な評価は物象的な外観をおびざるをえない。したがって「価値」はたんなる「抽象的人間労働（時間）」なのではなく、意識にたいしてはどうしても物の使用価値（の定量）というかたちをとってしか現れることができないような物的社会関係としての「抽象的人間労働（の時間）」なのである。そ

れゆえ、価値が労働（時間）として意識に現れないことをもって、また市場での交換が一見したところでは諸主体の評価と合意にもとづく需要と供給の関係のみによって決定されているようにみえるとしても、それだけではマルクスの労働価値説を虚偽のものとしてしりぞけることはできないのである。重要なのは、ここでの議論が、市場における主観の評価作用をどれだけ大きく認めるとしても変わらず妥当するということなのである。

次に、生産物の総量が社会的総必要量と一致しない場合——こちらの方が通例であるが——を考えておこう。生産物aが Σt時間($>\Sigma t$ 時間)をかけて過剰に生産されてしまったときの総量を $\Sigma f(t)$ 時間とし、社会的な総必要量が変わらないものとすれば、必要量を生産するための総労働時間も不変だから、市場での単位当たりの時間的価値は $\Sigma t/\Sigma f(t)$、したがってAの生産物の $f(t_1)$ 量の時間的価値は $f(t_1)\cdot\Sigma t/\Sigma f(t)$ となる[20]。分子は変わらず分母は大きくなるのだから、時間的価値は低下するであろう。また、生産物aが過剰に生産された結果生産物bの生産が不足したとすれば、$\Sigma g(u)<\Sigma g(u)$ だから、$g(u_1)$ 量の生産物bの時間的価値は上昇して $g(u_1)\cdot\Sigma u/\Sigma g(u)$ となる。このときもしも従来の交換比のままで交換が行われると、$f(t_1)\cdot\Sigma t/\Sigma f(t)<g(u_1)\cdot\Sigma u/\Sigma g(u)$ となるので、時間タームでみた不等価交換が生じ、より大なるものをより小なるものと交換するBは損失を蒙ることになるし、商品bの絶対量は不足することになる。したがってbにたいして提供されるaの量が増加して交換比が改善され、均衡＝等価交換が回復される方向に向かう。商品aと交換される商品bの量は減少するであろう。これをAの側からみると、個人的には大きな労働時間をかけて生産した生産物が社会的にはより小なる評価しか受けないのだから、他の市場へ赴くか、あるいは平均的な技術を有するなら生産物aを生産するよりbを生産した方が有利な立場に置かれる。Bの方もbの生産を拡大することを動機づけられるであろうから、aの生産は減少しbのそれは増加し、両生産物の生産量は社会的必要量に、そして実際に支出される総労働時間は社会的に必要とされる総労働時間に一致する方向へと向かうことになる。

したがって、商品生産者たちは「意識的に」時間を基準として交換しているのではないが、交換において等置される二商品の時間的価値は自動的ないし機械的に一致するのでもない。彼らは現在の他者たちの必要と生産を知らず、生産において互いに相手の行為を前提としていないのだから、市場での商品の交換比（価格）を前もって知ることはできないが、可能な限り自己の利益——使用価値と交換価値の最大量の獲得という——を追求することによって不等な関係を事後的に訂正するので、交換において等置される商品の時間的価値は長期的には一致することになるのである。

そして、この分析を前提とすれば、商品がなぜ外ならぬ「労働時間」を基準として交換され、他の基準、たとえばその「重量」や「大きさ」などにしたがって交換されないと言いうるのか、という古くからの問題にも答えることができる。すなわち、人々が市場ではなるべく多くの使用価値ないし交換価値を獲得しようとし、逆に与える方はなるべく少なくしようとすると言うことは、——労働時間と生産される財の数量をむすびつける生産関数が存在する以上——「労働時間」をなるべく多く獲得し、またなるべく少なく与えようとするように行動する、と言うことと等しいから、要するに暗黙の内に「労働

時間」を基準として社会関係を取りむすんでいる、と言うことに等しいからである。人々がそのように行為する限りでは、上に示したように諸商品は長期的にはそれらを生産するのに要する社会的必要「労働時間」が等しくなるように交換されるであろう。商品の「重量」や「大きさ」はたしかに異なる商品に共通する属性でありうるかもしれないが、こうした意味での行動の基準とはなりえないのである。

以上の議論を前提とすれば、『資本論』中の、商品の物神崇拝にかんして述べている節での次の章句の意味を理解することは容易であろう。

「したがって、人間がその労働生産物を相互に価値として関係させるのは、これらの事物が、かれらにとって同質の人間労働の単に物的な外被と考えられるからではない。逆である。彼らはその各種の生産物を、相互に交換において価値として等置することによって、そのちがった労働を相互に人間労働として等置するのである。彼らはこのことを知らないが、しかしこれをなすのである。したがって、価値のひたいの上には、それが何であるかということは書かれていない。……労働生産物が価値であるかぎり、その生産に支出された労働の単に物的な表現であるという、後の科学的発見は、……決して労働の社会的性格の対象的外観をおい払うものではない。」(21)

したがって、商品の価値形態はそれにたいして物神崇拝が生じる根拠でもある。もっとも、意識にたいして現象しないのは「抽象的人間労働」の時間だけではない。生産者Aは商品bの背後の生産の場からは遮断されているのだから、そこで他者Bによって与えられたはずの具体的な労働の「意味」をみてとることはできず、したがって商品bの属性や運動——これらはAの主観的な解釈の枠組に包摂することはできず、よそよそしい「物象」の集積のそれとして現れる——を真に「理解」することはできない。諸主体のそれぞれの物的行為を指示し、その意味の理解を担保していた同一の間主観的な規範はもはや存在していないのである。

ところが、交換の場において、したがってまた生産者（生産単位）間ではこのように時間は物象化されて現れるとしても、生産者自身（ないし生産単位）の活動内部では時間は逆に絶えず——それまでの社会で成立していた労働と生産物の安定した関係を超えて——意識的に合理化されていく力を社会構造から与えられることになる。すなわち、同一の時間内にある生産者によって生産される生産物の量が多ければ多いほど、また彼が個人的に消費する財の量が少なければ少ないほど、彼が市場で獲得できる交換価値と使用価値の量も増大するのだから、生産者は抽象的な欲求につき動かされて自己の活動を合理化し、生産性を高めようとするからである(22)。生産単位内部の活動が分業に基づいている限り、そこでは複数の主体は相互に他者の物的行為を前提としつつ行為を合理化していくことになるので、物的な媒介に基づきまたそれを志向する現実的な社会的行為は厳然として存続している。したがって、すべての生産単位がその内部で合理化を推し進めるなら、社会的な合理性は生産単位内部にしか存在していないにもかかわらず、全社会的にも存在しているかのようにみえてしまうであろう。この側面からすると、時間は諸主体の意志にしたがって分割され、操作されるために、なんら神秘的なものではないかのようにみえる。こうして、物象化された時間を獲得するために時間が合理化されていく——この結果、時間は直線的、数量的で無

限に分割可能な「時間」として自明化され、別の新たな意味で物象化されていく——わけであり、時間の過剰な合理化と物象化が併存する奇妙な社会的時間性が出現することになる。

結び

以上の議論——価値論の理解としては未だにきわめて不十分なものでしかないが——から、生産者の行動の時間性そのものが、財の生産と交換が構成している物的な社会関係によって規定されており、決してそれを意識の運動形式に回収してしまうことができないことが分かる。意識の構成能力と意識対象との関係のみから「価値」という現象の成立のメカニズムを見いだそうとすると、間主観性というかたちで社会的な契機を組み込みつつ、意識が自分の構成した対象を「自明視」したり「固定化」させたり、自分の構成作用を「忘却」したりするさまを説明することになるであろうが、このようなやり方では、原理的にはあらゆる対象の「意味」を構成し、したがってまたそれを理解しうるものとされる意識が、なぜ経験的な場でその能力を喪失することになるのかを真に理論的に説明するのは困難となろう。この場合、説明は「記述的な」水準を越えることはできないであろう。観念論的な枠組は、原理的に物象化の機制を解明するのに適していないのである。

逆に、「価値」ないし「価値形態」という現象の成立を、意識の構成作用とは無縁な物質＝商品の運動がなにか自動的、機械的につくりだしているものとして理解し、商品－資本主義社会に内在する客観的な「法則」として、ただ所与のものと前提としてしまうのも適当ではない。このような理解は、上の場合とはまた反対の意味で、意識の構成能力の限界を確定することを怠るために、やはり「価値」という現象が成立する必然性を説明することができないであろう。この場合、それは最初から理解不可能な「客体」の運動が示す一つの属性とされ、説明を放棄されるのである。

このことに加えて——マルクス主義の価値論そのものの問題ではないために本稿ではごく間接的に触れたにとどまったが——、個人の「内面」に形成される社会的な規範や主観的な「価値」は、他の領域に解消させてしまうことのできない固有の水準の物的関係を構成している。問題は、社会関係を構成するうえで媒介項としての「物質」が果たしている役割を理論のなかに組み込み、「意識」を「物質」の——高次の——「関係」としてとらえること——このことは、前者を後者の運動に「還元」したり前者を後者によって「決定」されているものとしてとらえることを意味するのではない——である。このためには、物的な諸項の運動が諸個人の意識を「規定」する関係と、意識がそうした諸規定を受け止め、それらを自由に組み合わせるかたちで「規定しかえす」ことのできる範囲をともに確定しなくてはならないのである。

註

(1)K.Marx, Marx Engels Werke(以下 MEW と略す), Bd.32, Dietz, Berlin, 1983, S.553「マルクス・エンゲルス全集』第32巻、1973年、大月書店、454頁

(2) もちろん、ここで「時間性」と言うときには、その量的な側面のみでなく、物的な側面によって規定されているその「質的」な側面もが考慮に入れられている。

(3)A.Cutler, B.Hindess, P.Hirst and A.Hussain, *Marx's 'Capital' and Capitalism Today*, vol.1, 1977 岡崎次郎、塩谷安夫、時永淑訳、『資本論と現代資本主義I』、1986年、法政大学出版会、12

頁

(4)K.Marx, *Das Kapital,* Bd.I, Dietz, Berlin, 1981, S.53 『資本論』(一)、1969年、岩波書店、74頁

(5) MEW, Bd.42, S.278, 105『資本論草稿集』1、1981年、大月書店、457、162頁。「素材の形態変換は労働の目的に順応するのである。労働は、生命のある造形的な火 (gestaltende Feuer) であり、生きた時間による諸物の形成として、諸物の無常性 (Verganglichkeit) であり、それらの時間性 (Zeitlichkeit) である。」

(6) 広松渉、『資本論の哲学』、1974年、現代評論社、138～149頁

(7) 柄谷行人、『マルクスその可能性の中心』、1978年、講談社、28頁

(8) 同 40頁

(9) *Das Kapital* Bd.I, S.192 前掲書(二)、9～10頁

(10)われわれが無意識のうちに身体の規則的な消化・吸収運動と同期化させている「腹時計」のようなケースも考えられる。また、マダガスカルでは30分ほどの時間を「米の煮沸時間」と呼び、一瞬のことを指すのに「いなごのフライ時間」という表現を用いると言う。Jacque Attali, *Histoires Du Temps,* 1982 蔵持不三也訳、『時間の歴史』、1986年、原書房、17頁

(11)ジャック・アタリによると、中世の修道院では、1時間は4ポイント＝40モメント＝480オンス＝22560アトムに分割されていたという。けれども、当然ながらこれは当時の技術では正確に計測できる単位ではなく、現実の対象の運動と関係づけることのできない「観念的」な解釈図式としての時間尺度でしかない。同書72～3頁

(12) *Das Kapital,* Bd.I, S.91 前掲書(一)、138～9頁。なお、本節でとりあげる三つの生産様式の時間性の類型は、商品－資本主義社会におけるそれと対比するための抽象的なモデルであって、単純に継起する歴史的関係を表しているのではむろんない。

(13)共同体的生産は、先の図4の特殊ケースであると言えようが、この段階では、近代的な意味での「精密な」時間計測は意味をもたないであろう。なお、ここで取りあげた「社会的規範」は生産手段や身体などの物的な諸項が構成している社会関係を統制するものとしてのそれを念頭に置いている。したがって、それは下位の物的関係によって規定されはする――たとえば現存している生産条件からして実現不可能な規範を形成しても、それは実行に移すことはできないので「死文」と化してしまう――が「決定」されてはいないような、相対的に自律的な高次の物的関係としての意識なのであって、たんなる観念的構成物なのではない。

(14) ibid., S.91 前掲書(一)、139～140頁。なお、共同体的生産様式の場合も封建的生産様式の場合も、価値形態以外の物象化ないし物神崇拝のメカニズム――これについては本論では取りあつかわないが――はもちろん有している。価値形態は物象化ないし物神崇拝の「特殊な」形態にすぎないのである。

(15)冒頭でも述べたように、本稿は商品－資本主義社会で成立する時間性をその完全に具体的な水準まで展開してゆくことはできない。価値形態の成立に焦点を合わせていることからも分かるように、以下の議論は単純商品社会にたいしても妥当するような、最も「抽象的な」水準にかかわるものである。

(16)宇野弘蔵、「価値論」、『宇野弘蔵著作集』第三巻所収、1973年、岩波書店、282頁

(17) MEW. Bd.42, S.90 『資本論草稿集』1、136頁

(18)生産者各人の生産関数はすべて異なるものとしても――その場合、各人の生産関数は $f_1, f_2, f_3, \cdots\cdots f_n$ となる――以下の議論は妥当するが、表記が複雑となるので同一の生産関数に基づくものと

仮定しておく。また、もちろん生産関数は直線的なものである必要はないので、たとえば $2f(t)=f(2t)$ である必要はない。

(19)ある社会的必要量を生産するための総労働時間量と、個別生産者への具体的労働時間の割り当てには解が多数存在するが、それはここでの議論の当否とは関係ない。

(20)供給が過剰ないし過少になり、「価格」が上下したときの社会的総必要量を可変としても、供給量の変化にたいする必要量変化の弾力性が1より小さければ以下の議論は同様に妥当する。

(21) *Das Kapital,* Bd.I, S.88 前掲書(一)、134頁

(22) M. ウェーバーが強調した近代資本主義社会の——特に経済的行為における——「合理化」作用とは、社会構造に規定されたこの合理化への圧力を、個人の内面からとらえたものと言えよう。ウェーバーが貨幣を「『完全無欠(vollkommenst)』の経済的計算手段、すなわち経済行為の志向における形式的に最も合理的な手段である」とよぶのも当然のことと言えよう。M. Weber, *Wirtscaft und Gesellscaft,* 5 Auflage, J. C. B. Mohr, Tübingen, S.45。M. ウェーバー、「経済的行為の社会学的基礎範疇」(世界の名著『ウェーバー』所収)、1979年、中央公論社、332頁

(にべ　のぶひこ)